

区分	(上段)氏名 (下段)所属	所信表明
1-1 北海道支部	ヒダ キョウコ 樋田 京子 北海道大学大学院歯学研究院 口腔病態学分野 血管生物分子病理学教室	私は北海道大学歯学部を卒業しがん患者の診療に従事後、大学院では口腔がんの浸潤転移機構について学びました、ハーバード大学小児病院への留学後基礎研究の道に進み、がんや新型コロナウイルス感染症における血管と微小環境ネットワークについて研究を行って参りました。本学会における活動としては、2010年に学術研究賞を頂き、2014年に学術評議員を拝命しました。2022年からは研究推進委員会委員を務めております。病理学は臨床と基礎医学の架け橋を担い、EBMの実施に重要な学問です。医療の目覚ましい進歩とともに病理学がさらに発展するためには、研究マインドを持つ病理医、病理学者を一人でも多く輩出することが重要と思います。私の経験は決して多くはありませんが、北海道地区理事として、会員増加、会員に対するサポート通じて本会の発展のために精一杯務めさせていただき所存です。ご支援賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。
1-2 東北支部	オオモリ ヤスフミ 大森 泰文 秋田大学大学院医学系研究科 分子病態学・腫瘍病態学講座	病理医は、20世紀前半には完成の域に達していたFFPEとHE染色という秀逸な手段を手にしたことにより、20世紀後半～現在に至る長きにわたり「診断病理」と呼ばれるビジネスモデルで、医療の分野で確固たる地位を築いて参りました。しかしながらそれ故に我々は、ともするとこの方法論にしがみついている感も拭えませんが、翻って臨床各科では、ほぼすべての領域で貪欲にフロンティアを切り拓き、自己変節にも躊躇をしません。病理もゲノム診断等の関連領域に守備範囲を広げてはいるものの、まだまだ新しいビジネスモデルとは言いづらい状況です。これは進取の気鋭に欠ける若手の意識と、寛大さに欠けるシニアの意識が相まって、現行の方法論への執着を招いた結果のように思われます。FFPEとHEを駆使できるのは病理医だけという保険の下、全世代に病理学の診断と研究の領域を広げる機運が必要であり、その涵養に微力を尽くしたいと考えております。
1-3 関東支部	ヤモチ トシコ 矢持 淑子 昭和大学医学部臨床病理診断学講座	このたび、令和6/7年の地方区選出理事（関東支部）に立候補させていただくことになりました。病理医がおかれている環境は日々変化しており、課せられる課題も分子病理学的診断を含み多岐にわたっており、一人一人に臨機応変な対応が求められています。私は現在、関東支部会理事として男女共同参画担当をさせていただいており、出産・育児や働き方改革とともに病理業務を行っていくかなどの病理医への支援に努めてまいりましたが、今後は今までの活動に加えて病理医へのリクルートや若手病理医の育成、病理医の生涯教育など、一線で活躍されている支部会会員の皆様の様々なニーズのもと、お役に立ちたいと考えております。よろしく願い申し上げます。
	ササジマ ユウコ 笹島 ゆう子 帝京大学医学部病院病理部	医学・医療の進歩とともに、病理学会や病理医を取り巻く社会環境は日々変化し続けており、要求されるニーズはますます増え多岐にわたっています。これらに直面し第一線で診療にかかわるエキスパート集団としての支部会であるとの認識の下、支部活動に少しでも貢献できればとの思いから2期目として立候補させていただきました。年4回の例会は、時節や地域事情等に合わせて現地、オンライン、ハイブリッドを柔軟に使い分け、多数の会員の皆様に参加していただけるような有意義な情報交換の場となるよう努力いたします。また、若手病理医のリクルート活動としてより魅力的な「病理学サマーセミナー夏の学校」を目指します。会員の先生方の日々の病理医活動に資する価値ある支部会を目指し、微力ながら尽力してまいります。ご支援いただきますよう、どうぞよろしく願い申し上げます。
1-4 中部支部	ミヤザキ タツヒコ 宮崎 龍彦 岐阜大学医学部附属病院 病理部	この度、日本病理学会中部支部選出理事（中部支部長）に立候補いたしました。いま、病理医を取り巻く環境は非常に厳しい方向に向かいつつあります。まずは働き方改革による業務・研修時間の制限、一方で、ゲノム医療の発展による病理の業務多様化、そして、AIの発展による病理学診断のありかたの变革。このような厳しい環境の中でいかに若手病理医を育成していくか、支部活動においてはこのポイントが最も大切と認識しています。幸い、中部支部には、支部交見会のみならず、東海病理医会、北陸病理集談会など、諸先輩方から脈々と引き継がれてきた地域単位の勉強会も充実しています。これらの会を最大限活用し、若手病理医の育成のお手伝いをしていくことを第一に目標として掲げたいと思います。さらに、基礎医学としての病理のあり方、臨床医学としての病理のあり方についても論点を整理しながら若手研究者の育成に寄与できればと考えております。
1-5 近畿支部	ハガ ヒロノリ 羽賀 博典 京都大学医学部附属病院病理診断科	私は令和4年度より近畿支部長を拝命しておりこのたび再任に立候補致します。近畿支部ではデジタルチケットによる学術集会参加費支払い、ホームページのデザイン変更、学生・研修医セッションの新設などを新たな試みとして始めました。学術集会におきましては、参加者数の増加や会場費の高騰に対応するため、オンサイト開催だけでなく、ウェブ開催も再検討したいと考えております。若手の発表・表彰からベテランの学びの機会まで幅広く地域の病理医のために活動したいと考えております。ご支援のほど何卒よろしく願いいたします。
1-6 中国・四国支部	マスマト ジュンヤ 増本 純也 愛媛大学大学院医学系研究科解析病理学講座	「病理学」の教育・研究・診療にかかわる先生方の立場は多岐にわたります。さまざまな立場でご活躍の先生が、知識を更新し、責任ある病理診断を提供するために、適切な診断のための精度管理、業務に見合った相応の診療報酬、知識の更新のための卒後教育を受けられることが必要です。今後デジタル画像からAIを活用した病理診断支援システムの開発が急速に進むと予想されることから、教育講演や教育集会のさらなる充実を図りたいと思います。また、ゲノム診療における病理医の役割の重要性が高まっていることから、多く医学部学生にリサーチマインドに溢れた病理学の魅力とそれらが具現化された刺激的な病理診断の魅力を伝え、次世代の病理学の発展に向けて尽力する所存です。
1-7 九州・沖縄支部	ヒサオカ マサノリ 久岡 正典 産業医科大学医学部第一病理学教室	この度令和6/7年度の地方区選出理事（九州・沖縄支部）に立候補させていただくことになりました。前任期(令和4・5年度)に引き続き、支部の活動をさらに発展できるように努めていく所存です。新型コロナウイルス感染症の第5類への移行に伴い、行動制限等が緩和される中で、対面でのスライドコンファレンスの開催がようやく復活し、支部会員のさらなる交流と相互支援を奨励したいと考えており、そのための必要な業務と運営を担わせていただければと思います。また、病理医の生涯教育、若手病理医の育成とリクルート活動、出産・育児に関わる女性病理医の支援を含む病理医の働き方改革についての提言なども支部を代表して行いたいと思っています。つきましてはご支援のほどどうぞよろしく願いいたします。

区分	(上段)氏名 (下段)所属	所信表明
口腔病理部会長 兼 全国区選出理事	キヨシマ タモツ 清島 保 九州大学大学院歯学研究院 口腔顎顔面病態学講座口腔病理学研究分野	今期に続き、次期口腔担当に立候補させて頂きたく存じます。口腔病理部会の行動目標や課題を引き継ぎ、皆様の多大なるご支援ご協力のもと整備を進めて参りました。これまでの懸案事項でありました口腔病理専門医更新基準が令和2年度末に改訂・施行となり、令和4年度より5年間の移行期間が始まりました。また、分子病理専門医制度運営委員会に参席して分子病理専門医（口腔）の認定制度の設置に携わり、令和4年度より分子病理専門医（口腔）の認定も開始されました。このような口腔病理部会・口腔病理専門医制度運営委員会における種々の活動を通じ、口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的提供に努めます。微力ではございますが、口腔病理部会の発展のために尽力する所存ですので、何卒ご支援、ご協力の程心よりお願い申し上げます。また、これまで同様、皆様の口腔病理へのご理解と共にご支援およびご教授頂ければ幸甚です。

区分	(上段)氏名 (下段)所属	所信表明
監事	クシマ リョウジ 九嶋 亮治 滋賀医科大学医学部病理学講座人体病理学部門 ／附属病院病理部・病理診断科	滋賀医科大学の九嶋でございます。この度監事に立候補いたしました。私は1986年に滋賀医科大学を卒業後、滋賀医科大学附属病院検査部、病理学第一講座、デュッセルドルフ大学病理学研究所、済生会滋賀県病院、滋賀医科大学附属病院病理部勤務を経て、国立がん研究センター中央病院病理・臨床検査科の医長を務めた後、滋賀医科大学に帰学しました。消化管病理を専門としており、日本胃癌学会の理事として胃癌取扱い規約委員会の委員長を務め、病理学会においても癌取扱い規約委員やHER2ガイドラインの委員などを務めています。令和7年度末で大学教授としての任期を終えることとなりますが、それと同じくして令和6/7年度の2年間、日本病理学会の監事としてお世話になった病理学会に恩返しできればと考えております。よろしく願いします。
	イトウ ヒロシ 伊藤 浩史 山口大学大学院医学系研究科分子病理学	私は宮崎医科大学（現宮崎大学医学部）を昭和61年に卒業後、直ちに同病理学第2講座に大学院生として入局以来、37年余り一貫して病理学研究者、病理専門医として活動して参りました。この間、病理学会奨励賞や病理学会学術研究賞を授賞させていただき、アメリカマサチューセッツ総合病院への2年間の留学を経て、平成17年に福井大学医学部腫瘍病理学講座教授として、平成25年からは故郷山口県宇部市にある山口大学医学部分子病理学教授として赴任し、研究、教育、診断に携わって参りました。定年退官も近づき、研究に関しては大きな業績は残せませんでした。最後のご奉公として病理学会へ貢献したく、理事会業務や財務状況の把握等、病理学会会員の皆様の代わりとなって監視役を果たすべく、今回この「監事」に立候補させていただきました。地方からの視線を含め、会員の皆様のために全力で働きたいと考えております。何卒よろしく願い致します。